

江記云、赤染は赤染時用女也、依歴右衛門志尉等號、赤染衛門、實兼盛女也云々、

〔玉勝間〕<sup>四</sup>小大君

三條院女藏人左近を、小大君ともいへり、そは小大進といふ名を、はぶきていへるなれば、こたいの君とよむべし、こおほきみとよむはひがこと也、此人小大進なる證は、榮花物語見はてぬ夢の卷に、あるはなくなきは數そふといへる、歌のよみ人、東宮女藏人小大進とあり、東宮は三條院也、

〔源氏物語玉の小櫛〕紫式部が事

紫式部といふ名は、實の名にはあらず、すべて女房に、式部、少納言、辨右近などいふたぐひ、みないはゆる呼名也、こは初學のためにつたはらず、此の實の名は世につたはらず、すべて古名高かりし女房、おほくは實の名は見えず、撰集どもにも、よび名をゑるされたり、さて式部といふに、紫和泉、小式部などあるは、式部といふが、あまた有て、まざる、故に、わかむため也、そは或は其姓、或は父、また夫などの、官母の名など、たよりにまかせて、よべりしなり、清少納言、江侍従などは、清原大江の姓也、和泉式部は、和泉守道貞が妻也、小式部は、和泉式部が子也、伊勢、大輔は、伊勢、祭主輔親の女なり、大貳三位は、太宰、大貳成章の妻也、さて紫式部も、もとは姓によりて、藤式部といへり、しと也、そは、どうまきぶとよむべし、江侍従も、どうまきぶとよむべし、清少納言などの例なり、ふぢまきぶ、えのまきぶ、うなどは、よむべきにあらず、男にても、江帥、藤大納言、在中將などのたぐひ、みなこゑによめり、

〔傍廂前篇〕寵

すべて女の上び名は、さらぬもあれど、大かたは父か夫かの官名をよばる、が多し、小兒もまじりたる百人一首の中なる女の上び名は、伊勢は、伊勢守繼蔭の女なり、右近は、右近の少將季繩の女なり、和泉は、和泉守道貞の妻なり、大貳三位は、太宰大貳成章の妻なり、赤染右衛門は、赤染時用の